

## 視察報告

### 再訪中国見聞記 (1988)

#### — 経済改革体制下における人民生活の一考察 —

浅見 益吉郎\*

What I have seen in re-visited China (1988).—A consideration on people's lives under the innovated economic policy.—

Masukichiro ASAMI

#### A. はじめに

筆者はさきに1981年、約半月にわたり初めて中国各地を旅行した際、とくに中国人民の生活実態に大きな関心を抱き、その見聞や印象をまとめて本誌に報告した<sup>1)</sup> (以下これを“前報”と呼ぶ)。当時はかの文化大革命 (1967~77, 以下“文革”と呼ぶ) が終息して日も浅く、数度の失脚にも耐え抜いて政権を握るに至った鄧小平氏の領導下に、“4つ (農業、工業、国防、科学技術) の現代化”政策が緒に就いたばかりの頃であった。従って中国人民の生活には、未だ文革時代の名残りの陰影が色濃く反映していた一面、長かった混迷期の停滞から脱却しようと努める人民の心意気も感じられる時期でもあった。

その後も筆者の中国に対する関心は募る一方であったが、83年にごく短期の観光旅行を試みた以外、訪中の機が得られなかった処、偶々本年 (1988) の夏期休暇中、2度 (8月9~14日、9月10~19日) にわたって中国各地を巡遊する機会に恵まれた。この両度の旅程を合わせた旅行先は上海、揚州、蘇州、南京、武漢、蕪州<sup>かん</sup> [湖北省] 及び西安の各地である。

今回の訪中においても、筆者が最も関心を抱いたのは中国人民の暮らしの実態であった。言うまでもなく、広大な中国からすればごく限られた地域を、半月程度旅行したに過ぎない筆者が人民生活の全体像を誤りなく把握しようと企てること自体、分に過ぎたおこがま

\* 衛生学第1研究室

しい所為である。従って本稿の内容には多くの誤った認識や判断があるかもしれない。しかし少くとも、筆者は両度の旅行中に直接見聞ないし体験した数々の事象のうち、特に重要な意義を持つと感じられたものを例挙し、その背景にあるものを公刊されている各種文献や報道より得た知見に基いて、前報と対比しながら検討を試みる方式を貫いて記述した積りである。

#### B. 見聞・体験と感想

##### 1. ホテルブームと市民の住生活

鑑真号<sup>＊1</sup> が神戸を出港して間もなく、“上海での宿が未だ決まっていない方はロビーの中国国際旅行社のカウンターへどうぞ……。”という船内放送を聞いて先ず驚いた。前報の訪中当時は中国の外人用宿泊施設が逼迫し、ホテルの予約もしない中国旅行などは無謀に近かったからである。こんなアナウンスがあるからには、この頃では宿も決めずに中国へ出掛けても心配が無くなったのかな?と、筆者の認識不足加減に自嘲すら感じた。

48時間の船旅で疲れた身体をバスで揺られて上海の街を走っていると、あちこちで工事中の高層ビルが聳え立っている景観が目についた。ガイド<sup>＊2</sup>の説明によ

\* 1・1985年以来、阪神~上海間を週1往復就航している日中合弁の定期客船。筆者は8月の訪中時にこの便を利用した。

\* 2・国営の中国国際旅行社を通じて行う団体旅行では、必ず全コースをエスコートする通訳と訪問地ご

れば、そのほとんどが外資系(香港・華僑資本を含む)のホテルだそうである。やがてこれらが完成すれば、既に需要に対して飽和に達しているホテルの過当競争が今後一層激しくなるのは当然予測される。

常に貿易収支の赤字<sup>\*3</sup>に悩む中国にとって観光による貿易外収入は大切な外貨獲得手段であり、外国人客(中国では在外華僑を含めて“外賓”と呼んでいる)を誘致する為にホテル建設が第一義的に重要であることも理解できる。しかし、上海だけの現象なのかも知れないが、過当状態を惹き起すまでのホテル建設ラッシュを目のあたりにして、少々その“計画性”に疑念を持たざるを得なかった。現にガイドの説明もこのようなホテル・ブームにはかなり批判的で、“近頃上海市民の間には、ホテルよりもわれわれの住宅を優先して充実してほしい、という声が高まっています。”と、問題点を憚りなく指摘していた<sup>\*4</sup>。

実際市民の側よりすれば、このように切実な叫びを挙げたくなるのも当然であろう。前報にも指摘したように中国人民の暮しのなかで最も深刻なのは住生活である。とくに人口超過密状態の大都市の住宅事情は想像に絶するものがあると言われている。勿論政府も都市住宅の整備を重点政策の一つとして事態の改善に努め、都市住民1人当りの居住面積は80年度に4.96m<sup>2</sup>であったものが85年末には6.66m<sup>2</sup>に増加し<sup>3)</sup>、さらに87年には1人当たり平均使用面積が10m<sup>2</sup>(3.03坪)に達したと報じてはいるが<sup>4)</sup>、上海、北京や天津などの大都会では6m<sup>2</sup>台(2坪前後)に止まっており、しかも大都市住宅の1/4以上は台所又はトイレの無い不完全住宅(“<sup>クワンフアンフ</sup>欠房戸”)といわれている<sup>5)</sup>。また後述するように、中国ではその異常な人口年令構成<sup>2)</sup>に因って適令期に達した男女が急激に増加し、結婚ブームが始まっているが、折角周囲の祝福を受けた相愛のカップルも住宅入手難のために結婚が延びのびになっている例も少なくないようで<sup>6)</sup>、住宅の増設と居住性の改善<sup>5)</sup>は民生安定のためにも喫緊の重要性を持っている

との案内を担当する現地ガイドの2名が同行する。彼等の日本語も前報訪中時のガイドより格段と流暢になったのに感心した。

- \* 3・最近やや改善の兆しは見られるが、1987年までの中国の累積赤字額は324億米ドルに達しているとのことである<sup>2)</sup>。
- \* 4・いやしくも国家公務員である彼らが、“小事”とはいえ、外賓を前にして公然と国の政策に非難がましい批判を加えることなど、前報訪中時には全く考えられなかったことである。
- \* 5・住宅が質的にも改善を要することは、大都市に限らず、巡訪した地方都市や農村でも事情は変らな

ることを到る処で痛感した。

## 2. 茅台酒の値上げと物価の動向

友誼商店<sup>\*6</sup>やホテルの売店の品に付けられている値札は、どれも前報時のそれに較べて確かに数割(ものによっては数倍)高くなっている。しかし前報当時の為替レートが1元:120円前後だったのに対し、円高の今日では37~38円程度まで下落しているの、却って日本円の遣い心持は良くなったといえる。だが土産にする心積りをしていた貴州の名酒、茅台酒<sup>マオタイ</sup>を探したが何処にも見つからない。やっと上海の工業展覽館(これも友誼商店の一つ)で見つけた茅台酒の値段はナント120元!前報当時は確か14~15元位だったのにと驚きながら買い控えたが、後で知った事は筆者らの訪中直前(1988・7・28)突如として高級酒類と上質煙草の価格が軒なみに一挙数倍も引上げられていたのである。これを報じた北京週報<sup>7)</sup>は国务院の見解として、“中国人民の一般生活必需品が値上りの折柄執った新しい物価改革の措置であり、これら高級物品の消費者は国家機関や高所得の個人(暗に公費宴会をやる高級官僚や外国人を指しているものと推察する)に限られているので、深刻な社会的影響をもたらさないであろう。”と嘯いている。とくに酒類の値上げに関しては、中国の酒造に使用する穀類年間消費量が1,400万トン(国民の食糧1カ月分に相当)に達したので、その節約が大衆の根本的利益に合致すると判断したためと説明している。

このような大巾値上の当否については、局外者である筆者がとやかく論ずるのを差し控えたい。しかし、当局も認めざるを得ない国民生活必需品がここ数年来急激な値上り傾向を示している現象は、人民の生活に深刻な影響を及ぼしていると考えられる。

一般に中国の標準的な都市労働者の平均月収は、現時点で70~80元程度と推察され<sup>8)</sup>、国際レートで換算すれば信じられない程の少額である<sup>\*7</sup>。にも拘らず人民の生活水準が建国(1949年)当時の温飽(なんとか生きて行ける)状態から、小康(まずまずの暮らし)へ

いように見受けた。揚州や蘇州などでは、表通りはともかく、ちょっと横町(胡同)をのぞけば、まさに清代のさながらの老朽化した家が立ち詰まった“趣きのある”景観に接することができる。

- \* 6・外賓専用の売店で大抵の大都市や観光地に建てられており、土産物類が主体であるが、長期滞在外国人のために高級食料品や輸入商品も販売している。店内で通用するのは外貨兌換券に限られ、人民元で買い物することはできない。
- \* 7・それでも前報当時の40~60元程度に比較すれば、少くとも額面的にはかなりの増加を示している。

と向上を示して来た背景には、最近まで人民政府の強力な物価抑制政策が徹底し、とくに食糧品に対しては手厚い価格差補給制度が執られてきたからであると考えられる。しかし82年以降、画期的な農業開放化政策（次節参照）が採り入れられて以来、農業生産性は飛躍的に向上した反面、自由価格化した食糧品を始めとする諸物資価格の高騰は、人民の消費購買意欲の増大と相俟って、当局のコントロールの限界を超えてしまったのではないかと思われる\*8。

巨視的に見れば、現政権が推進している経済体制の根本的な改革や開放化政策<sup>9,10</sup>は“近代化への脱皮と先進国水準への接近”という窮極的な目標へ着実な歩みを続けていると信じたい。しかしその過渡期に当る現在、派生するさまざまなひずみが、中国人民の日常生活にかなりきびしく影響していることも否定できないであろう。ことに物価問題は、今日中国及び中国人民の当面している種々の苦悩や矛盾の中で、切実かつ最大の難関であることは、最高実力者、鄧小平氏自身が88年5月、訪中したD. ロックフェラー、H. キンジャー氏らの米国経済代表団との会談で述べているところである。また李鵬國務院総理も同代表団に、諸物資価格の不都合が市場経済の実行に大きな障害となっており、その調整には長い時間と周到な計画の必要なことを認めている<sup>11</sup>。

物価問題は必然的に、開放化政策にともなって不均衡が目立っている国民所得の公平適正な調整とも関連している。いずれも中国が根本的な近代化を達成する道程の中で避けることができない“通過儀礼”であろうが、ここ当分人民の暮らしはこれらをめぐって揺れ動くであろう。

### 3. “向銭看”の風潮

上海発南京行の快速列車。軟座車<sup>9</sup>の指定席におさまった途端、“コンニチワ”とたどたどしい日本語でハンサムな服務員（列車ボーイ）がにこやかに声を掛けて来た。話してみると彼は名門K大日本語科の1年生で、夏休みのアルバイトに乗務しているとのこと。列車が蘇州を過ぎた頃、喉に渇きを覚えた同行の1人が、彼に10元紙幣を渡して、次の停車駅で罐ビールと

ジュース6本を買ってくるよう依頼した。次の無錫駅に停車中、彼はフォームに降りて、註文以上の9本を買って求め併せて16元だった残額を請求した。言われる俛に差額を支払ったが、下車した鎮江の駅売店で定価を調べると、どう見ても数元はボラれている。金額はさて置き、こんなペテンまがいの事を“純真”であるべき学生にしてやられ、またそれを見送ってしまったことに、同行者は立腹よりむしろ悔ましいと述懐していた。

不愉快な事例は1挿話だけに止めておくが、今回の旅行中何かとねだられ、せびられ、或いは執拗な押売りに煩わされたのは一再に止まらず、こんな体験が全く無かった前報当時との世相の変転に感慨を持った。

1982年頃から積極的に推進されはじめた開放化政策は、農村での（共産）党・政を一体化した集団営農組織だった人民公社の解体<sup>\*10</sup>と農業個人請負制<sup>\*11</sup>の導入や地域特性を活かした郷鎮企業<sup>\*12</sup>の育成、或いは都市農村を問わず自由に認可された個人企業家の活動により、時流に乗じて忽ち巨万の富を積むことのできた万元戸<sup>\*13</sup>や億元郷が出現した一方、蓄財の機会や

\*10・度を過ぎた“平等思想”に立脚して組織・運営されて来た人民公社体制は、窮極的に農民の勤労意欲を低下させ、農業生産性も著しく低下させる弊害を生ずるに至ったので、その解散措置が実施され、85年にはほぼ完了したといわれている。

\*11・農民個人の責任で公有地である一定面積の農地の耕作を請負い、定められた額の収穫物さえ上納すれば、余剰作物の収益はすべて請負った農民の所得に帰する制度。請負契約期間は当初1～3年を限度としていたが、次第に長期化して中には15～30年のものさえ現れ、しかもこれが転売される事例も生じて、土地の“使用権”（所有権ではないが）的性格を帯びつつある<sup>9</sup>。

\*12・日本流に言えば郷は村落（村）、鎮は宿場程度の小市街地（町）に相当し、人民公社の解体後は、これらごとに民政を司る“人民政府”（と言えば大袈裟だが要するに“町村役場”）が最末端の行政機関として設置された。現在全中国で鎮の数は9,140、郷は82,450あるといわれている<sup>12</sup>。最近郷や鎮を単位として地域特性を生かし、小廻りの利く小規模共有企業の設立が盛んとなり、地域社会の経済発展や余剰労働力の吸収に大きな貢献をもたらす注目されている。とくに外資を導入したり、製品輸出で外貨獲得のホープとなっている企業は中国経済活性化の一翼を担う存在として期待されている<sup>9</sup>。

\*13・“年収”1万元以上の蓄財を成し遂げた農家。日本円に換算すれば“生活保護”の対象になる水準の少額に過ぎないが、中国の農民の平均年収が文革当時の2倍以上に向上したとは言え、現在も400～500元程度なのに比較すれば数十倍の額に相当する。

+ 8・前報当時は漸く農民1人当たり60m<sup>2</sup>程度の“自留地”生産物の自由処分が認められていた程度であったが、これらが集散する“自由市場”は非常な活況を呈し、ともすればインフレ傾向を生ずる可能性をはらんだ物価動向を示していたのは指摘しておいたとおりである。

\* 9・日本で言えばグリーン車。外賓は原則として一般中国人用の硬座車には載せてくれない。

才覚に恵まれなかった人々の間に“紅眼病”<sup>\*14</sup>と揶揄される不満層も生ずるに至った。

しかし現政権の政策はこのような貧富較差の発生を抑制するよりはむしろ、これを好個の刺戟剤として“先富起来，後富起来”<sup>\*15</sup>のスローガンを掲げている。勢い、(その手段、方法はともかく)“豊かになること(つまり金もうけ)は良いことだ”という向錢看<sup>\*16</sup>と皮肉混りに呼ばれる風潮が人民のあらゆる階層にわたって拡がってしまったようである。社会主義体制下にあるとは言え、金銭感覚に鋭くなること自体は一概に責められるべきではなかろう。しかしごく少数ではあるが、蓄財のためには手段を選ばぬ輩が横行し、中国の経済的モラルを荒廃させると共に、政治の綱紀までも乱して人民の信頼を傷ける事件さえ少なからず報じられている<sup>5,8,12,13</sup>。

ここで是非触れておきたいのは外貨兌換券のことである。我々が中国内で円貨を両替して手にする兌換券(中国銀行発行)は国内で通用している人民幣(中国人民銀行発行)と本来等価値の建前であるが、現実には友誼商店など外資専用店でしか売られていない高級商品や外国製品は兌換券でないと購入できない。そのため外国製品が欲しい中国人はプレミアを付けても兌換券を入手したが、現在人民幣との交換比率(もちろん闇の)は1.5~1.7倍に達している<sup>8</sup>。それどころか店によっては、中国内では絶対通用する筈のない“福沢先生”や“夏目先生”でも“喜んで”売って呉れるのが現実である。我々が散歩にホテルの門を一步出ると、そっとすり寄って声を掛けて来るのは、手にした人民幣の束でそれと判る兌換券との交換屋である。勿論一度も応じなかったので交換比率がどれ程かは知らないが、彼等(中年の婦人もおれば若い男性もいる)の服装や物腰の決して卑しくないのがひとしお感慨を催した。前報当時、兌換券では受け取って貰えず、市中での買い物が無ならなかったのに較べて大変な様変りに驚くと共に、この処国際レートで下落傾向にある元が、国内でも実質的に二重価格となっている点に中国経済の複雑な一面をうかがい知った次第である。

\*14・羨望や嫉妬で眼が血走って紅くなる“病氣”の意。

\*15・先に豊かになれた者はそれはそれで良く、これを見習って後に続く者も豊かになろう”の意。

\*16・鄧小平氏が政権の中枢に就いた直後の1979年12月に開かれた党第十一期三中全会での施政方針中にある標語，“一切向前看”(過去に拘らず、すべて未来を見つめて前進しようの意)をもじったもの。

#### 4. 一人っ子——中国の人口問題

美しく着飾った子供の両手を若い両親が左右から引っぱり嬉々として散歩する姿は、どの街の公園や動物園でも常に見られる幸せ溢れる家庭団らん像である。さらに祖母と覚しい中年婦人が目を細めて背後からそっと子供の肩に手をやっている4人連れも珍らしくない。少くとも10才以下の子供を2人以上も連れている家族などは絶対に、と言ってよい程見当らない。このように、わが国にも良く知られている中国の一人っ子政策の徹底振りとその効果は街角でも容易にこの目で確かめることができる。

言うまでもなく中国が世界にも類を見ないこのような政策を文革終結の直後から推進しているのは、前報でも述べたように、強力な人口抑制策を執らなければ、極めて早い時点で総人口が国の扶養能力限界を越えてしまうのが必至であるという、さし迫った危機感に駆られているからである。“多子多福”の観念が伝統的に受け継がれて来た国で、全くこれと相反する政策を執らねばならない当局の苦衷は察するに余りある。

中国がこのような危機に直面している最大原因は、大躍進期<sup>\*17</sup>から文革期にわたり、著名な人口学者、馬寅初(当時北京大学長)の面を冒しての諫言をも斥けて野放図に執られた人口増加政策によることは明らかである。この間中国の人口は6.5億(58年)から9.5億(77年)と驚異的な増加を示している。第1節でも述べたように、今やこの時期の出生児が次々と結婚適令期に入っており、今後は1夫婦1子制を厳しく実行させても、一旦1.2%程度まで低下した人口増加率が今世紀末までは再び漸増を続けるのを避けることができず<sup>12,15</sup>、中国が当初目標として来た今世紀末人口を12億の線で抑えることも達成が困難ないし容易でなくなってきた。この点は彭珮雲国家計画出産委員長ならびに李鵬國務院総理とも率直に認めている<sup>16,17</sup>。

実際中国を旅行すれば、都市農村の別なく、わが国に較べて、10才台後半から20才台の男女の数が非常に多い印象を受ける。これらのヤングパワーは文字どおり、中国が目指す近代化への希望を托する活力の源泉ではあるが、一面人口問題の観点に立てば、当局が頭を抱える苦悩の種ともなっている存在なのである。

\*17・1958~62年、建国以来10年を経て漸く基盤固めを終えた中国が毛沢東の唱導下に一層の国運増進を意図して展開した国民運動期。しかしこの名称とはうらはらに、余りに杜撰だった当初計画が次々と破綻して成果を挙げず、加えて61~2年の大凶作に追打ちを掛けられ、惨澹たる失敗に終わったと評価されている<sup>12,14</sup>。

一人っ子（中国では“独生子女”と呼んでいる）のしつけや訓育も小さからぬ社会問題としてしばしば採り上げられている<sup>12,18,19,20</sup>。彼らは一家一族の“掌中の珠”であり“期待の星”なので、ともしれば過保護で我儘、ぜい沢放題に育てられた“小皇帝”<sup>\*18</sup>として家庭に君臨し、或いは両親が過大な期待から無理な英才教育を強いる結果性格が歪められるなど、俗に“四二一総合症”<sup>\*19</sup>と呼ばれる数々の弊害が憂慮されている。当局もこの問題を重大視し、初等教育において彼等に欠如し勝ちの社会協調性や作業意欲（能力）を習得させる訓練に重点を置いて成果を挙げつつあるとのことである<sup>20</sup>。

一人っ子問題の陰影はこれだけに止まらない。結婚届に添えて1人限り出産の誓約書を提出した夫婦は出産時から14年間は毎月5元の手当（平均月収の10%にも当る少くない額である）が支給され、その他住宅、教育、医療などで、もろもろの優遇措置を受けられるが、万一誓約に反して第2子を産めば夫婦双方の月給から10%、さらに第3子まで産めば15%の天引が強行され、その他の社会的ペナルティーも覚悟しなければならない。従ってこっそり第2子以下を出産しても出生届を出さないで<sup>\*20</sup> 無戸籍の仮放置されている“闇の子供”が増えはじめ（88年6月30日付、人民日報によれば、その総数がナント100万人に達するという）、深刻な社会問題となりつつある<sup>21</sup>。

さらに将来、一人っ子同志が結婚した場合、どちらかの両親の老後扶養をどのようにすれば良いかなど、いずれ解決を迫られる諸課題が一人っ子をめぐって山積している。

しかし中国当局が必死になって人口抑制に努めているのは、直接的には自国の国益を目的としたものであるかも知れないが、さらに高い全地球的視点に立てば、既に50億を越え<sup>\*21</sup>、開発途上国を中心に止めどもなく膨張し続けている世界人口の抑制に大きな貢献を果していることも高く評価されねばならない。李鵬総理も88年6月30日の“アジア30億人デー”に当たってのテレ

\*18・中国では皇帝という言葉に“超法規的獨裁権力者”の意味が籠められ、絶大な権限を握っている地方ボスを“土皇帝”などと呼んだりもする。

\*19・つまり1人の子供のまわりに2人の両親、その又まわりに父方母方合わせて4人の祖父母が一緒になって起こさせる病気の意。

\*20・中には出生届を提出しても人口管理請負制<sup>11</sup>で管内出生数に責任ノルマを課せられている役場が受理を拒否した事例さえあるという<sup>12</sup>。

\*21・1987年7月11日、国連はこの日を以て世界人口が50億に達したことを宣言した。

ビ演説で“世界最大人口国として、中国は今世紀末人口を12億前後に抑える努力が必要”なことを強調している<sup>17</sup>のも、その責任感の表れとして敬意を表したい。

## 5. 中国の大学——教育問題

南京で筆者の母校（岐阜薬大）の姉妹校である中国薬科大学（中国語で薬の字に“葯”を充てる）を表敬訪問した。現在学生数は約4,000名の中規模大学であるが、中国では2校しか無い薬系大学の一つである（他は遼寧省瀋陽にある）。それ程宏大なキャンパスとは言えないが、研究機器や学術図書はよく整備され、何よりも真剣な学生の授業態度に心を搏たれた。文革期に謂れない知識階級への弾圧と学術軽視の暴挙から一旦壊滅状態に陥ったといわれる中国の大学も、その後着々と復興整備され、現在では全国の大学、専門学校数は1,000校を超え、年間入学者数は日本の大学・短大入学者数とほぼ等しい60万人に達している。ただし中国の人口はわが国の10倍に近いので、高等教育を受けた者を人口比率で比較すれば遙かに低く、在學生を合せても未だ全国民の2%にも達していない現状にある。この数字を見ただけでも、中国が近代化のために必要としている高学歴人材の育成が如何に困難な課題であるかが理解されようが、この国の教育全体を見渡せば、基本的に改革、充実しなければならないのは、むしろ初等、中等教育の部面であろう。

中国の学制は原則的にわが国と同じ6・3・3制だが<sup>\*22</sup> 入学は1年遅い満7才時である。1982年の憲法改正により9年間の義務教育制<sup>\*23</sup> が明文化されたものの、全国的な基盤整備は未だ不十分で、全面的な実施は90年度以降になると見られる。現在全国の小学校への就学率は98%（約1.3億人）に達しており<sup>24</sup>、その限りではまずまずの数字に見えるが、現実には中途退学ないし不就学児童の数は3割以上もあり、十分な学力を身につけて卒業するのは残りの半分程度と言われている。この傾向は全人口の8割を占める農村部でとくに著しく、近代国家の実現には極めて大きな障害となる若年文盲者の増加が憂慮されている<sup>\*24</sup>。<sup>25</sup>

\*22・ただし一部の地域では文革中に1年短縮された小学校5年制が回復されない仮残されている<sup>12</sup>。また学令前の幼稚園教育もかなり普及しており、園数約10万、入園児は約1,600万人といわれている<sup>22</sup>。

\*23・目下6・3制と5・4制のいずれを採るかが教育界で論議・検討されている<sup>23</sup>。

\*24・中国では識字数500字以下を文盲としている。少し厳しいようだが漢字しかない国なので、この判定基準は妥当なのだろう。82年の調査によると、文盲総数2.78億で全国民の20%を越える。内9割までが

中国の初等教育にはこの他にも教員の人材不足や給与の低さ、学校施設の貧弱など、根本的に改革を要する問題が山積している。

中等教育（初級中学，高級中学・日本の高校に相当）となると就学者概数はグッと減って初級は4,170万人，高級は職業校を含めて1,230万人となる<sup>24)</sup>。中国では初級中学卒業以上の者を“知識人”と呼ぶ，と聞いたことがあるが，この基準で見てもその総数は精々2.5億人程度で全国民の2割強にしか当たらない。

近代化をはかる中国にとって，教育の普及により国民の知識水準と資質能力の向上をはかることが基本的に重要であるのは自明の理であり，為政者もこれに対する努力は怠っていないが<sup>25)</sup>，それに至る道は長くけわしいものがあるといえよう。

### C. む す び

筆者が今回両度の中国旅行中直接見聞・体験した事象から深く考えさせられた問題は以上に止まらない。例えば，長途バスツアーの際悩まされた泥濘の悪路から地方産業振興に不可欠なインフラストラクチャー整備の難かしさを察し，道路工事に駆り出されている人夫たちの仕事振りから彼等の勤労意欲を疑い，稔り豊かな田園を走るバスの車窓へ侵入してくる“昔懐かしい” DDT やパラチオン<sup>26)</sup> の臭いに散布する農民の健康や食品の安全性を案じ，見学した漢方薬局の繁昌振りから中西医学の一体化したユニークな医療制度に関心をもち，街頭に貼り出された露骨な性病予防ポスターに開放体制下の性道徳の現状に思いを馳せたりした。

中国が現在推進している近代化政策の基幹は，社会主義体制を崩すことなく資本主義的制度や生産・流通方式を大巾に導入して経済機構の改革と活性化をはかろうとすることにある。まさに“竹に木を接ぐ”のたとえの通り，本来相容れない異質の存在と考えられている両者のドッキングが果して目論見どおり活着するか否か，活着したとすれば一体どのような“植物”に生育するのか，恐らくは人類史上初めての大胆な試みであるだけに大きな期待と関心が持たれる。

目下の処竹の台本（社会主義体制）につがれた木の接穂（資本主義的方式）は相互の異質性を調和させな

農民で，性別比は男31%，女69%となっている<sup>8)</sup>。

<sup>25)</sup> 88年4月の内外記者会見で，李鵬総理は88年度予算中，教育経費の引上げを最重点に置き，前年比15%の増額を行ったと答えている<sup>21)</sup>。

<sup>26)</sup> いずれも戦後わが国で繁用されていた殺虫農薬であるが，その強い毒性のため，先進諸国では1970年台に使用禁止となった。

がら，かなりの果実を結び，中国のGNPや生産性あるいは産業体質に著しい改善の兆がうかがわれる。しかし一面，現政権が最も警戒しているのは実り豊かな接穂の体液が台本の芯にまでしみわたって，これを変質させてしまう恐れであろう。現に一部の学生や知識人の間には，言論思想の完全自由化を叫び，多党民主化政体の実現を訴える声が公然と起きているのも隠れもない事実である。

もとより或る程度の試行錯誤は覚悟の上<sup>27)</sup>での“大実験”だけに，今後も種々の摩擦相剋や軌道修正は生ずるであろう。このように揺動する改革過渡期を乗り切って，中国人民が経済的にも豊かに，精神的にも健全に生長して呉れることを，この国を愛する隣邦の一員として願わずにはいられない。

### 参 考 文 献

- 1) 浅見益吉郎：“中国見聞記（1981），とくに人民の生活に視点を向けて”，本誌，36，50（1981）。
- 2) 大野静三：“「難関」に立つ中国経済”，日本放送出版協会（1988）。
- 3) “人民中国” ’87，（No. 1） p. 110（1987）。
- 4) 同誌，’87（No. 4） p. 110（1987）。
- 5) 小島朋之：“生きた中国学”，学陽書房（1988）。
- 6) 今田好彦：“現代中国百景”，中公新書（1986）。
- 7) “北京週報”，’88（No. 31）（1988・8・2）。
- 8) 立花丈平：“新中国はどこへ行く”，時事通信社（1988）。
- 9) “経済体制の改革に関する中共中央の決定”（中国共産党第12期中央委員会採択）外文出版社（1984）。
- 10) “中国都市の経済改革体制”北京週報社（1987）。
- 11) “北京週報”，’88（No. 23）（1988・6・7）。
- 12) 竹内 実：“現代中国の展開”NHK ブックス（1987）。
- 13) 天児慧：“中国改革最前線—鄧小平政治のゆくえ”，岩波新書（1988）。
- 14) 安藤正士ら：“文化大革命と現代中国”，岩波新書（1986）。
- 15) “人民中国”，’88（No. 6） p. 34（1988）。
- 16) “人民日報海外翻訳版”，No. 89（1988，8，5）。
- 17) “北京週報”，’88（No. 28）（1988，7，12）。
- 18) 同誌，’88（No. 29）（1988，7，19）。
- 19) “人民中国” ’86（No. 9），p. 109（1986）。
- 20) 同誌，’87（No. 5），p. 18（1987）。
- 21) “北京週報” ’88（No. 17）（1988，4，26）。
- 22) “人民中国” ’88（No. 2），p. 114（1988）。
- 23) 同誌，’86（No. 9），p. 86（1986）。
- 24) 同誌，’87（No. 7） p. 51（1987）。

<sup>27)</sup> B-2に記した米国経済代表团との会見で，鄧小平氏は“国内のこれ程複雑な状況下では誤りを犯すことは避け難い。一旦誤りを犯したら直ちに是正し，大きな誤りに発展するのを防がねばならない。”と述べている<sup>11)</sup>。

中国の表情 (1)



性病予防ポスターに立ち止る市民 (南京)



パンダに見入る一人っ子夫婦 (上海動物園)



建設中の高層ホテル (上海)

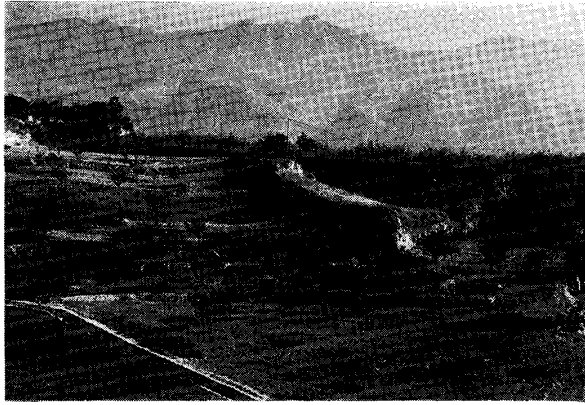


中国薬科大学構内 (南京)



伝統的な四合院建築の中庭に建て増した  
超過密住宅 (南京)

## 中国の表情(2)



緑化の進む黄土高原(陕西省潼関付近)



日本語の看板もある土産品店(上海)



人口抑制宣伝スローガン(湖北省黄石)



増水する揚子江畔の浸水家屋(黄石対岸)



ショッピングで賑う繁華街(南京)



ロバも自由に散歩する田舎町(湖北省蕪州)

(いずれも筆者撮影)